

シンポジウム・口承芸芸の未来

伝統的な語り（I）

花 部 英 雄

寄せ、「昔話は決して固定的ではなく流動的で、語り手の性格と聽き手の要求によつて変化するものである。」（『日本昔話の社會性に関する研究』 関敬吾著作集1）と述べる。この発言は、ロシアのアザドフスキイなどの外國の語り手の研究に基づいたものであるが、これより前には「昔話生物学」というタームで語り手研究の必要性を説いている。

一、はじめに—昔話生物学の視点から—

「昔話の語りが危機に瀕している」とは、私が学生時代だつた昭和四十年代後半ごろから、よく耳にした言葉である。だからこそ今採集しておかなければと、半ば使命感にも似た思いでフィールドに出かけたことを覚えている。それから三十年近く経つた今日、それがしだいに現実のものとなりつたある。（）数年、青森県史編纂のための口承芸芸調査で、県内を歩きながらしばしば実感するところである。何が変わつてしまつたのだろうか。

昭和の前半期の昔話研究をリードしてきた柳田国男と関敬吾の二人のうち、昔話の語り、語り手に対する態度は両者対照的であった。柳田は宗教的、職業的な伝播者に対するたびたび言及したが、村の語り手・聞き手、また語りの場については、管見によればほとんど触れなかつたようである。一方関は、昔話の社会性に強い関心をもつた。

記録された昔話と生きている昔話との違いを標本を比喩に説明している。このあと、昔話の伝承基盤である村落における昔話の機能が娯楽や、農耕儀礼などの生産と深く関わつてきたと指摘する。関のこの昔話機能論は、裏返せば危機に瀕している現在の昔話伝承の状況が、何によるかを考えるヒントになりそうである。

記録された昔話と生きている昔話との違いを標本を比喩に説明している。このあと、昔話の伝承基盤である村落における昔話の機能が娯楽や、農耕儀礼などの生産と深く関わつてきたと指摘する。関のこの昔話機能論は、裏返せば危機に瀕している現在の昔話伝承の状況が、何によるかを考えるヒントになりそうである。

そこで、関が昔話が生きて村落に伝承されていることをはかる目安とした「いつどこで、誰によつて、何のために語られ」るかの指標を、ここでは途絶えようとしている現在の昔話の伝承を分析する手段に用いてみることにする。語りの未来を展望するにあたつて、かつての姿を整理しながら現状の把握へとつなげていきたい。

二、昔話の伝承形態の昔と今

昔話伝承の実態に関する研究については、これまでに多くの成果がある。そのおもなものを挙げるなら、野村純一「昔話の伝承形態」「昔話の管理・伝承権」「語り手の位置」(『昔話伝承の研究』昭五九)、稻田浩一「昔話の生成—その伝承・伝播を通じて」(『なおらいの昔話』(『昔話の時代』昭六〇)、佐久間惇一「越後の語り手—波多野ヨスミー」(『昔話の語り手』昭五八)、武田正「木小屋話」(『木小屋話』昭四六)、同「民話(昔話)の語り手と聞き手」(『日本の民話を学ぶ人のために』平一二)、野村敬子「産室の語り—サンバの語り手をめぐって」(『民話と文学』昭五九年)、松本孝三「説話伝承の系譜—昔話伝承の担い手とその機会—」(『民間説話 日本の伝承世界』平元)、花部英雄「伝承者・伝播者」(『民間説話 日本の伝承世界』平元)などがあげられよう。

さて、これらの研究に基づきながら、これまでの伝統的な昔話伝承の概観をおさえておきたい。そして、これを目安に現在の衰退状況をとらえていきたい。

わが国の昔話伝承の形態を語りの場からみた場合、家庭内伝承と

村落伝承とに大別できよう。外から村を訪れる説話伝播者も、語りの場・機会からみれば右の中に収斂されるはずである。家庭内伝承とは、家における親から子・祖父母から孫といった縦の関係の中で継承されるのに対し、村落伝承は村の共同仕事や行事等の場における横のつながりの中で伝承される。前者は家族の絆を深め、家の継続意識を養うことを主眼におき、団欒における娯楽や情操の涵養、家意識の高揚といった機能を持つている。一方後者は、結いや共同仕事、若者宿等での娯楽や座興、また寄合や仲間同志の触れ合い、祭礼・講・行事等において成員としての自覚やアイデンティティを高める役割を果たしている。そうした目的を、いつ・どこで・誰によつて行われているかを概括すると次のようになろう。

家庭内伝承は、夜に親の夜なべ仕事をするイロリの傍らで、あるいはコタツや寝床で親・祖父母から伝承される。一方、村落伝承は共同作業の場や、あるいはその後の振舞いの席、若者宿や娘宿、ハレの祭りや講の堂舎(通夜^{トナハ}の席等で、聞き手も子どもや若者、大人などを対象として行われる。そのような多様な機会と場に、村の語りべの役割を担つた人や、語り爺さん・語り婆さんと称される有力な語り手が招かれて語るのである。

ところで、このような従来の語りが、現在どのような状況にあるかが次の問題である。それについては「はじめに」で述べたように衰退の危機に瀕しているの一言であるが、ただその具体的な状況を説明するのは難しい。ここでは従来の伝承に対し、何が欠落し変質しているかを大まかに表に示して対比してみたい。ただし伝承の現状認識については個人差が大きいであろうから、あくまでも恣意的

なものでしかないことを断わっておく。

表Ⅰ 家庭内伝承

いつ どこ だれ 何のため	夜 イロリ、コタツ、寝床 父母、祖父母 娯楽、情操、家の継承	昔
	寝床 父母 娯楽、情操	夜 寝床 父母 娯楽、情操

表Ⅱ 村落伝承

いつ 結い・共同作業、ハレの祭り・ 講・通夜・寄合	昔	今 (祭り・講)
どこ 仲間、村の語り爺さ・婆さ	作業場・若者宿・堂舎 (語り爺さ・婆さ) (娯楽)	
だれ 何のため	（堂舎） (娯楽)	

三、三上ヤエの昔話伝承

人の語り合いも同様で、活性はあるが伝承という点では切れている。なかには老人が小学校のゆとりの学級に出かけて語るということもある。耳にするが、ほんのごく一部にすぎないだろう。それよりは、地域の文庫や図書館での語りに接する機会の方が多いだろう。新しいコミュニティーの創出の中すでに語りが交替しているといえるかも知れない。

さて、昔話の伝承形態の今昔について大まかな把握を試みたところで、次には個別の事例を通してさらに深めていきたい。取り上げるのは青森県中津軽郡西目屋村に住む三上ヤエ、六十四歳である。現在、夫元作氏と農業のかたわら、民宿「みかみ」を営んでいる。

ヤエ女は昭和十一年二月二十六日、同郡岩木町百沢に父佐藤貞修、母マヨの長女として生まれる。小学校三年生の時に終戦を迎えるが、その頃に聞いた昔話を今もよく覚えているという。そのヤエ女の伝承する昔話は次の通りである。

「蟹の仇討」「兎と亀」「時鳥と兄弟」「鶴女房」「田螺息子」「桃の子太郎」「鼠淨土」「花咲爺」「米福藻福」「狐のお産」「親捨山」「嘘の皮」「人参と牛蒡と大根の風呂」「おぶさりたい」(以上は、國學院大學民俗文学研究会の平成三年夏の調査による)「鼠の嫁入り」「十二支由来」「馬鹿聲」「炭焼長者」「鼠の相撲」「鷦鷯は鳥の王」「郭公と母子」「雀孝行」(以上は平成十年夏の筆者の聞き取り)「夢買長者」「三枚のお札」「食

わざ女房」「笠地蔵」「大歳の火」「舌切雀」「鴻の卵」「川瀬と狐」「猫の踊り」(以上は平成十一年六月二十一日の筆者の聞き取り)「鳥と鳶の色づけ」「貧乏神」(以上は平成十一年十月十日の筆者の聞き取り)の三十三話である。なお、伝説、世間話はここでは取り上げていない。ちなみにヤエ女の伝承形態を、先述の伝承形態で示せば次の通りである。

いつ / 正月過ぎの一ヶ月余りの夜
どこ / ストーブを開んで
だれ / 祖母の三上カヨ
何のため / 娯楽

昭和十年代は、すでにイロリに代わる新ストーブの時代である。ヤエ女の語る昔話はすべて母方の祖母三上カヨからのものである。祖母のカヨは、明治生れで隣村の相馬村に住んでいたが、毎年正月が過ぎると一月ぐらいい娘の家に泊まりに来ていたという。

ヤエ女の生家の佐藤家は分家で、いわゆるオジの家であつた。それがヤエ女の昔話習得には幸いしていた。カヨにとって舅・姑と同居しない娘のもとを訪ねるのは気楽であつたろうし、さらに娘の夫は毎年正月を終えると、カムチャッカ方面に出稼ぎに行つたという。長期間にわたって泊まり込んで気兼ねが要らなかつたのである。そのうえ百沢には三本柳温泉という共同湯があり、湯治を兼ねて娘のもとを訪ねていたことになる。

一般に分家した東北のオジの家は生活に手一杯で、とても子ども

に昔話を語つて聞かせる暇も余裕もなかつた。ヤエ女の生家も同様で、父母は仕事に忙しく、昔話はおろか話もあまり聞いたことがないという。したがつて、祖母が定期的にしかも長期間泊りに来てくればことになれば、家庭内での昔話の習得はなかつたであろう。また祖母のカヨの側からすれば、主婦権をすでに譲渡していなければ一ヶ月も家を開けることができないだろうし、その年齢の頃に気兼ねなく訪ねていけるのは、行く先の孫がまだ幼い年頃の、したがつて下の娘に限られてくる。ヤエ女の母は下から二番目であった。こうした条件にかなうのは難しいだろうから、普通にはオジの家での昔話の伝承は困難といえる。

一方、聞き手の側の問題もある。ヤエ女は昔話が好きで、祖母のカヨの昔話を一度聞いただけで、その時の語りの表情まで覚えているという。いかに集中して聞いていたかがわかる。そのとき妹や弟、また近所の同年齢の子どもも一緒に聞いていたが、他の人はほとんど昔話を覚えていないという。そのように話し好きを自認するヤエ女ではあるが、テレビで流れる昔話を見て、市原悦子の語りを覚えようとするのだが全然覚えられないという。さらには、いま覚えている昔話はほとんどが小学校二年生から四年生の頃に聞いたもので、中学生になつても聞いたけれど、そのときの昔話は全く覚えていないという。多少の個人差はあるかもしれないが、昔話を習得するおよその年齢はあるようである。その年齢と祖母の訪問とが重ならなければ昔話の継承はありえないことになるから、一般的にはオジの家の昔話の伝承はなかなか成立しがたいというべきであろう。

ところで、ヤエ女は祖母のカヨは「頭のいい人」という。昔話を

多く知つてゐるだけではなく、縫物が得意で、コギン刺しもできるし、また藁細工も上手であつたという。そのカヨのもとに習いに来る村の大人が何人もいたと話す。ストーブの窓際の位置に決まって座る

カヨを聞みながら、大人は手仕事、子どもたちは昔話を耳を傾ける

ことが多かつたという。子どもだったヤエ女のカヨに対する評価は、

手仕事の器用さにもあつたが、その基本はやはり昔話の語りにあつ

たであろう。ヤエ女は、カヨが昔話を語り終えた後に、その話を教

訓に導いていくのが巧みだつたという。説話者が説話の最後に添

える感想の手際よさに共通しよう。同じ昔話を二度語つたことはな

いというほど多くの昔話を知つており、またそれらの昔話を自家薬

籠中の物のように自在に教訓化できることへの賞賛であろう。ヤエ

女はそうしたカヨの昔話と人柄に深く敬意を寄せているのである。

学校から帰ると、大人が多くて藁細工をしているのが嫌になることもあつたというが、母から「人の家に人が来なければよくない」と諭されたといふ。それは祖母カヨの思いでもあつたにちがいない。現在民宿を営み、客の接待ができるのも、あの頃があつたからと回想する。昔話を媒介にして聞き手ヤエ女は、深く祖母カヨの心に通じている。いうならヤエ女の人格形成に、語り手カヨは大きく関わっていたといえる。

語り爺さ、語り婆さが社会的要請を担つて村にいたのは、尊崇される社会的土壤があつたからである。村落共同体の存立や個人の人格形成の上に昔話が有効に機能していいた時代は確かにあつたのである。三上ヤエ女の祖母カヨに対する思いは、そうした時代の名残を十分に感じさせてくれるものである。現在、三上家には内孫がいな

い。外孫が遊びに来たときに、絵本を見せながら遊び言葉を教えたら喜んでいたというが、祖母の昔話をじっくりと聞き、後世に継承させることができるであろうか。

四、伝統的な昔話伝承の終焉

さて、昔話の未来への展望に向けて現状を分析するに、結果は悲観的といわざるを得ない。衰退という時代の趨勢は止めようもないが、何がこうした事態をもたらしたのか、少なくともその理由の一端なりともつきとめておくことが、今後の継承を考える一助になるかもしれない。

繰り返すことになるが、川上ヤエ女の昔話は、嫁いだ娘を案じて訪ね、長期に滞在する祖母から、孫や近所の子ども、時には手仕事する大人をまじえた語りの場で習得したもので、いうならオジ型の昔話伝承である。イロリに代るストーブを囲んでの伝承の場であった。ところで現在、ヤエ女の場合のような語りの場は衰退してしまつた。それはイロリ（ストーブ）という制度の喪失という問題ではあるが、その背景には、伝承を担つてゐる人の話に耳を傾けるというコミュニケーションの形態そのものが機能しなくなつてゐることをあげなければならない。それは村落伝承においてより顕著といえる。共同の作業や寄合、行事などの消失と、それを支えていた共同体の紐帯意識が希薄変質してきていることが原因であろう。コンビニに象徴される全国的な均一化の波や価値観の多様化が、それまでの伝統的な制度や伝承を社会の深部から崩壊させてゐるといつて

も過言ではないだろう。昔話および昔話の語り手への畏敬の念の喪失もそれと関係し、昔話の命數を一気に縮めているように思われる。伝承文学や南島の伝承に造詣の深い福田晃氏は、歴史的文脈からみた伝承の衰退について次のように述べている。

神話にしても、伝説・昔話にしても、それなりにかけがえのない秀れた文化であるが、それにもかかわらず、その伝承が頽れてゆくのはなぜか。云うまでもなく、その伝承のそれが、社会の現実的 requirement に、十分応えられなくなつたからである。言いかえるならば、それぞれのもつてゐる思想が必ずしも、その現実社会に単純には応えるものではなくなつたということである。

〔総説・民間説話〕『民間説話 日本の伝承世界』

昔話のもつ思想、世界觀が時代に適応できなくなつたとするのは同感である。伝統的な語りをそのままの姿で保存継承することは不可能である。時代が作り上げてきた固有の方法・形態は、時代が葬り去っていくのが自然の筋道ということになるのかもしれない。

(はなべ・ひでお)

シンポジウム・口承芸術の未来

伝統的な語り(Ⅱ)

川 森 博 司

一、囲炉裏の場の消滅とともに失われたもの

厳密に言えば、昔話は必ずしも囲炉裏のまわりでばかり語られたわけではないが、ここでは囲炉裏の場を伝統的な語りの伝承を象徴するものとして、話を進めることにしたい。祖母や祖父から孫へ、あるいは、母や父から子へと伝統的な昔話を語り伝えた囲炉裏の場は、戦後日本の高度経済成長のなかで、失われていった。つまり、昔話の伝承の基盤が根こそぎ奪われてしまったわけであるが、この囲炉裏の場の消滅とともにわれわれが失つたものは何か。この問題を引き受けることから、考察を進めることにしたい。

囲炉裏の場が失われていく状況のなかで、多くの熱心な研究者による昔話の聞き取りがおこなわれ、「昔話は生きている」という感動をもたらしたことも事実である。囲炉裏の場が失われても、昔話の伝承は語り手の記憶のなかに、たしかに生きていた。この事実が